妄想を歓迎する映画

フレームサイズが1:33/1のモノクロ、主人公が修道女であるパベウ・パヴェリコフスキーの「イーダ」を見て、わたしは、イエジー・カヴァレロヴィッチの「尼僧ヨアンナ」(61)を思い出さずにはいられなかった。

時代設定が1961年なのも暗示的だ。孤児として修道院で育ったアンナ(アガタ・チェシェブホスカ)は、修道女になる式をまえに、院長から、唯一の親戚である叔母のヴァンダ(アガタ・クレシャ)に会ってくるように言われ、街に出かけるが、そのついでに彼女が、映画館で「尼僧ヨアンナ」を見たかもしれない。繊細な音採りと、〝暗号〟を仕込んだディテールのために、見る者が奔放にその奥行きを拡大できるのである。

表題は、アンナのユダヤ名で、ホロコーストにポグロムが加わった1940年代のポーランドの複雑なユダヤ人問題の主題につながるのだが、その話は映画で見てもらうとして、ここではヴァンダに焦点をあてるのである。

彼女は、共産主義政権のエリートであり、かつては検事として〝人民の敵〟を摘発してきた。が、1950年台後半から〝雪解け〟がはじまり、ワイダやカヴァレロヴィッチやポランスキーらの映画も活気づいていた。彼女のようなエリートは、スターリニストとして批判にさらされる。

ナチズムと闘い、新制ポーランドを勝ち取った世代のヴァンダは、その後の官僚主義化が許せず、それに加担している自分も嫌悪しているが、なすすべもなく、酒と男に溺れて投げやりに生きている。とはいえ、彼女のようなタイプは少数派で、やがて官僚主義派は反撃を開始し、つかのまの自由は圧殺される。

彼女は、結局、モーツアルトの交響曲41番のレコード(ブルノ・ワルター指揮)をかけながら窓から飛び降りるのだが、そのまえに写真をテーブルのうえに並べて見ているシーンがある。YouTubeのトレイラーでも映っているので書いてしまうが、家族や親戚と思われる写真のあいだに強靭な意志をみなぎらせた女性の顔写真が見える。そして一瞬その写真のピントが強まるのである。それで気づいたが、この女性はイレーナ・センドラーだ。反ナチの地下組織〝ジェゴタ〟の活動家として、ナチの魔手から2500人にものポーランドのユダヤ人の子供たちを逃した歴史的な人物である。

ヴァンダが、戦中〝ジェゴタ〟の一員であり、幼児のアンナがその出自を知らぬまま修道院に保護された背景にセンドラーの尽力があったと考えると、この映画の背景がグッと深まる。

「尼僧ヨアンナ」は、カソリックの修道女にユダヤの悪霊が憑(と)りつき、それを救おうとするエクソシストの神父がみずからその悪霊をわが身に憑り込む話であるが、「イーダ」の最後の十数分のシーンは、なにかがアンナのなかに憑りついたことを示唆する。服を着替えるということは、変身することであるが、それは、逆にいえばなにかの憑依を迎え容れることでもある。

それから彼女は、なにもなかったかのようにもとの姿で修道院にもどるのだが、その帰途を映すシーンでだけ心象描写的に流れるBGMが、ポーランドの作家スタニスラム・レムの原作にもとづくタルコフスキーの「惑星ソラリス」(77)で使われたバッハのコラール(BWV639)であるのも暗示的である。映画が終わったあとからはじまるアンナ/イーダの物語を想像するのはスリリングである。

Ida/2013/ Pawel Pawlikowski

tetsuo@cinemanote.jp http://cinemanote.jp